

平成 21 年 6 月 10 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18530490

研究課題名（和文） 社会的判断における誤帰属の生起条件と適用範囲に関する研究

研究課題名（英文） The scope and applicability of misattribution in social judgment

研究代表者

外山 みどり (TOYAMA MIDORI)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：20132061

研究成果の概要：

誤帰属とは、本当の原因ではない何らかの要因に、ある事象・行動・感覚の原因を誤って帰属することで、特に、自己の生理的喚起や内的・主観的感覚を誤った原因に帰することにより、情動の認知や社会的判断が歪むことが注目されている。本研究では、主に単純接触効果と呼ばれる現象に関わる誤帰属の実験的研究と、一般人がさまざまな事象をどのように説明するかという直観的因果理論に関する調査研究を行った。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,100,000	0	1,100,000
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	540,000	3,440,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：社会的認知, 感情, 判断の誤り, 直観理論

## 1. 研究開始当初の背景

誤帰属(misattribution)とは、文字通り誤った帰属、つまり本当の原因ではないものに、事象・行動の原因を帰することを指すが、主にこの用語が使われるのは、自己に関する誤った因果的推論およびその結果導出される情動や判断の誤りについてであり、より一般的に、原因帰属や特性帰属に際しての誤った推論、帰属のバイアスや誤謬を指す「帰属の誤り (attribution error)」という語とは区別される。

誤帰属の現象に関しては、1960年～70年代に、主に情動の自己帰属の分野で活発に研

究がなされた。その後、社会的認知研究の進展につれて、情動以外の認知的判断等に対しても、誤帰属の観点から解釈できる現象が多くあることが指摘され、研究の範囲が急激に広がった。具体的には、単純接触効果、有名性効果、プライミングの影響などが、誤帰属の立場から解釈される事例である。

この種の現象においては、既知感、親近感、知覚的流暢性、気分の良し悪しなどのような微妙な主観的経験の原因を、本来の原因ではない別の要因に帰することによって、当面の対象に対する好悪や、さまざまな種類の認知的判断が左右される。たとえば、単純接触効

果の場合には、繰り返し同一の刺激を見聞きすることによって生じる既知感、知覚的流暢性を、反復接触という本来の原因に帰するのではなく、対象に対する好意に転嫁する現象であると考えることができる。

このように誤帰属は、従来、プライミング、感情情報機能説、単純接触効果、ヒューリスティックの作用などとして、別個に研究されてきた様々な社会的認知現象を、共通の観点から統一的に説明することを可能にしたと言えるが、当然ながら、誤帰属は常に生じるわけではなく、それが生じやすい条件、生じにくい条件がある。またどのような状況におけるどのような判断に、それが適用されるかも明らかにされなければならない。

帰属そのものに関する研究、そして誤帰属に関する研究は、数十年來、世界各国できわめて活発に行われてきたが、誤帰属の生起条件と適用範囲を正面から検討した研究は数少なく、いまだに十分解明されていない。日本国内での誤帰属研究は、何人かの研究者が散発的に行っているだけで、まとまった成果は報告されておらず、社会的認知研究と帰属研究との有機的統合が必要とされる状況であった。

## 2. 研究の目的

以上の背景のもとに、本研究では、社会的判断に関連する誤帰属の現象が、どのような条件のもとで生じ、またどのような主観的感覚がどのような判断に適用されるかという点を明らかにすることを目的とする。

誤帰属は、熟知感や知覚的流暢性、漠然たる快 - 不快感情などのような、本人も明瞭に意識できない微妙な潜在的感觉をもとにしているため、どのような性質の主観的経験が誤帰属を引き起こすのかが必ずしも明確になっていない。これを明らかにすることが本研究の第1の課題である。

また、ある種の主観的感覚がどのような範囲の判断に影響を与え得るのかという限界も明らかになっていない。たとえば従来の単純接触効果の研究から、刺激との反復接触の結果として、当該刺激に対する好意度が増加することが知られているが、それは「美しさ」や「優秀さ」などの認知的判断にも影響を与えるのか、あるいはもっと広範囲の判断にも影響を与えるのか、などの問題を吟味することが必要になる。ここでは、刺激の種類と判断との適合度が問題になるであろう。

誤帰属が生じるためには、その帰属判断が自己の経験している内的感覚に対する「もっともな説明」と感じられなければならないはずである。どのような種類の内的経験に対して、どのような説明が心理的に適合したものと認知されるかという点も究

明すべき課題である。この課題に関しては、一般の人がさまざまな結果の原因をどのように認知するか、どのような因果関係を自然と感じるかという、直観的因果理論を検討することも必要である。

誤帰属の研究は、個々の具体的な社会的認知現象の解明に役立つだけでなく、明確に意識にのぼらない潜在的な心理過程と、それを解釈しようとする意識的過程の二重性という、基本的な理論的課題にも接近することを可能にするものである。

本研究では、単純接触効果を用いた実験室実験3種類（うち1つは現在続行中）と、直観的因果理論に関する質問紙調査2種類を行ったが、以下では、実験室実験と質問紙調査の1つずつを報告する。

## 3. 研究の方法

### (1) 単純接触効果に関する実験室実験

刺激の反復呈示がその刺激に対する好意度を増すという現象は、単純接触効果として知られているが、それが好意以外の判断、意思決定、選択に対しても影響を与えるか否かを調べるため、顔写真の反復呈示が、架空の投票選択に及ぼす効果を検討した。

さらに、この実験では、反復呈示を受けた後に選好判断を行う際、いかにも判断の決め手になりそうな、もっともらしい理由が与えられれば、選好判断はより確信のあるものになると考え、選好判断の際に、政治的スローガンまたは候補者の個人属性を付加して、その効果を吟味した。

方法は、大学生117名（そのうち分析対象108名）を対象とした実験室実験である。

<予備調査> 本実験に先立って予備調査を行い、実験で用いる顔写真、選挙スローガンなどを選定する手がかりとした。顔写真については、過去の選挙候補者の写真をホームページより入手し、本実験の参加者とは異なる35名の大学生に印象評定を求め、評定値が特に高いものと低いものを除外して、平均値に近い2枚ずつを組にして、合計10ペアを作成した。最終的に使用された顔写真はすべて男性のものであった。

選挙スローガンについては、過去の選挙ポスターから28個を選び、17名の大学生に、それらのスローガンを掲げている候補者がどの程度よいと思うかを評定させ、その結果から、平均値の近いものを組にして合計10ペアを作成した。

候補者の属性については、経歴や家族構成などの情報をセットにして30組用意し、18名の大学生に、候補者の属性としての望ましさを評定させて、平均値の近いものを組にして合計10ペアを作成した。

<本実験>

117名の実験参加者は、付加情報なしの「通常群」、選好判断に際して政治的スローガンが付加される「スローガン条件」、個人属性情報が付加される「個人属性条件」の3条件にランダムに分けられ、さらにそれぞれの条件内で2種類の顔写真セット(A, B)のどちらかを多数回呈示されるかの違いにより(①の説明を参照)、2群に分けられた。つまり実験条件は、3×2の6条件である。

実験は以下の3セッションから構成される。

#### ① 反復呈示セッション

参加者に、選挙候補者であるとして、20枚の顔写真を呈示した。20枚の写真は、10枚ずつA, B2セットに分けられ、参加者によって、一方が8回、他方が2回呈示された。顔写真はランダムな順序で、パソコンの画面上に呈示された。呈示時間は4秒、刺激間に1秒間のブランク画面をはさんだ。このセッションでは、すべての条件で写真のみが呈示された。

#### ② 挿入課題

白地図に都道府県名を記入するという無関連課題を5分間行わせた。

#### ③ 選択・評定セッション

<通常条件> 参加者は各ページに2人の候補者の顔写真が左右に印刷された冊子を手渡され、各10ペアに対して、どちらに投票したいかを回答した。その後、全体的な印象のよさの評定も7段階で行った。

<スローガン条件> 参加者に渡される冊子には、2人の候補者の顔写真とそれぞれの選挙スローガン(選挙公報にのっているような種類のもの)が印刷されていた。2種のスローガンは、予備調査の結果に基づき、効果がほぼ同等と考えられるものを対にした。参加者は、通常条件と同じく、各10ペアのどちらに投票したいかを回答し、全体的な印象を7段階で評定した。

<個人属性条件> 参加者に渡される冊子には2人の候補者の顔写真と各候補者の個人属性が印刷されていた。参加者は他の条件と同じく、各10ペアのどちらに投票したいかを回答し、全体的な印象を7段階で評定した。

#### (2) 直観的因果理論に関する質問紙研究

人間が身の周りで起こる様々な事象について原因帰属を行う際には、他の諸事例に関して収集された情報(例、Kelley(1967)の合意性、弁別性、一貫性)が手がかりになる。しかし現実には、入念な情報収集とテストが行われるのは特別に問題が重要な場合であり、多くのケースでは、どのような原因がどのような結果を生じるかという、因果関係についての知識や信念が大きな役割を果たす。専門家ではない一般人がもつ、この種の素朴な因果理論、直観的因果理論について説明するこ

とは、誤帰属の研究にとっても重要な意味をもつ。誤帰属に際しては、ある結果に対してもっともな原因(plausible cause)、自然な原因と感じられるものに帰属がなされると考えられるからである。つまり、原因と結果の間に適合性が感じられる必要がある。本研究では、誤帰属に関する知見を拡大するために、一般人の直観的因果理論に関する質問紙研究を行う。

方法としては、大学生64名に対して、集団場面で質問紙調査を実施した。

#### ① 質問紙の構成

日常的な行動や出来事の事例を12種類あげて、主要な原因は何であるかという自由記述させた後、次のページで、同じ12種類の行動・事象に対して、21の選択肢の中から原因である可能性のある要因を選ばせるという形で回答を求めた。

自由記述については、「なぜそのような行動や結果が起こったかを考え、一番主要な原因として頭に浮かんだこと」を記入するよう求めた。

選択肢からの選択の際には、原因と考えられるものをいくつでも選択可としたが、最も重要と考えられる原因と次に重要と考えられる原因には、それぞれ◎と○をつけるよう求めた。

#### ② 質問紙のバージョン

質問紙には2種類のバージョンがあり、それぞれに望ましい結果・行動と、望ましくない結果・行動が各6個ずつ含まれている。内容的に対照的な正負の結果・行動(例、「学年末試験でよい成績をとる」vs.「学年末試験で悪い成績をとる」)が2つのバージョンに分かれており、バージョン間の比較によって、結果の正負の効果を見ることを意図した。

結果・行動の内容としては、学業、スポーツなどの達成結果、対人関係、自己、ボランティア活動、大学授業への出席、アルバイトの勤務状況などが含まれている。

## 4. 研究成果

### (1) 単純接触効果に関する実験室実験

#### ① 投票選択の結果

選択セッションで、どちらの候補者に投票したいかを尋ねられた際の選択結果を図1に示す。この実験では、個々の写真の効果を相殺するために、20枚の顔写真をA, B2セットに分け、一方を8回、他方を2回呈示した。表1は、Aセットに属する写真の選択率を示しているため、Aセット多数群では50%を超えている場合、Bセット多数群では50%よりすくない場合に、単純接触効果が生じていることになる。

セットAの選択率を従属変数とした2要因の分散分析を行うと、多数呈示セットの主効

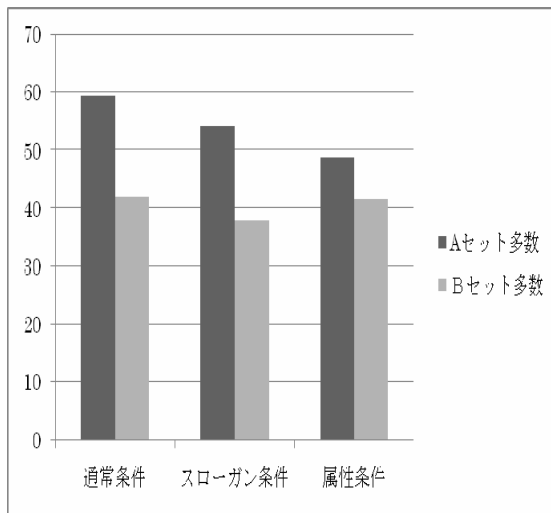


図1. Aセットの選択率 (%)

果が高度に有意であった ( $F(1, 102)=15.58, p<.001$ )。付加情報の主効果および交互作用は有意でなかった。下位検定の結果では、通常条件とスローガン条件では、多数呈示の刺激を選択する傾向が明瞭であるが (通常条件  $F(1, 102)=9.03, p<.003$ , スローガン条件  $F(1, 102)=7.44, p<.008$ )、属性条件では有意差が得られなかった ( $F(1, 102)=1.34, ns.$ )。

単純接触効果が生じているかどうかを確認するために、セットA, Bをこみにして、条件ごとに多数呈示セットの選択率を算出すると、通常条件では58.7%、スローガン条件では58.3%となり、いずれも50%を有意に超えている ( $t(37)=2.87, p<.007$  および  $t(35)=2.83, p<.008$ )。つまり通常条件とスローガン条件では、単純接触効果が明瞭であった。しかし属性条件では、多数呈示セットの選択率は53.8%であり、チャンスレベルの50%を有意に超えておらず ( $t(33)=1.28, ns.$ )、この条件では単純接触効果自体が確認されなかった。

## ② 写真、付加情報に対する評定

個々の顔写真および付加情報に関する評定では、全条件中で唯一、多数呈示刺激に対する選択率が50%を割っているAセット多数呈示-属性条件で、Bセットの顔の評定がやや高い傾向が見られる程度で、他の評定に関しては、特に目立った傾向は見られなかった。

## ③ 結果のまとめと考察

本実験の結果では、候補者の顔写真の反復呈示が模擬的な投票選択に及ぼす影響が確認され、写真が多く呈示された方の候補者に投票するという傾向が通常条件とスローガン条件では顕著に見られた。これは、反復呈示が当該刺激に対する好意の増大を生じるという通常の単純接触効果が、単に好意のみならず、投票行動にも影響を与える可能性を

示唆し、単純接触効果の適用範囲を拡大する方向の結果が得られたということが出来る。

しかし、付加情報の効果に関する事前の予測は支持されなかった。すなわち、政治的スローガンまたは個人属性情報は、選択の際のもっともな理由となり得るために、選択を後押しする形になり、単純接触効果がより促進されると事前には予想していた。しかし、結果をみると、単純接触効果が最も顕著であったのは、何も情報を付加しない通常条件であり、スローガン条件ではそれよりやや効果が弱く、属性条件においては、反復呈示の効果自体が有意にならなかった。この結果は、洗剤の商品選択を題材とした山田・外山 (2006) の結果とは一貫しない結果である。このように前研究と一致しない結果が得られた原因としては、本実験では、付加情報が顔写真と分離された形で呈示されたために顕現性が高まったこと、また投票選択においては、理性的な判断が求められるため、付加情報の内容に対する注意が強まったことなどが考えられる。この点に関して、今後さらなる検討が必要である。

## (2) 直観的因果理論に関する質問紙調査

次に一般人の直観的因果理論を調べるための質問紙調査の結果に移る。この研究では、原因を自由記述させる方法と与えられた選択肢の中から選択させる方法の2種類の測度を用い、その両者を比較した。

### ① 自由記述の結果

自由記述に関しては、記入欄を比較的狭く設定したためもあって、比較的類似した記述が多く見られた。記述のコーディングと整理集計は、研究目的を熟知していない大学院生1名が行い、筆者が確認した。コーディングに際しては、細かい表現の違いは無視して、ほぼ同等の回答と思われるものを1項目とした。それぞれに項目に対して、最も多かった回答を表1. に挙げ、回答の集中度を示す指標として、最頻回答の比率を表示した。

これを見ると、事故の場合の「不注意」、成績に対する「勉強」などは、最頻回答の比率が高く、原因と考えられるものに関しての合意が高いことがうかがえる。

原因の種類についてみると、努力や練習の有無、好き嫌い、欲求、動機などを原因として挙げる記述が多いことが注目される。また周囲の状況や相手の反応など、外的原因に分類されるものも挙げられているが、能力や性格などのような内的特性・傾性の記述は少ない。結果の正負による違いについては、化学実験の場合、ポジティブな結果 (新しい発見をする) では偶然に、ネガティブな結果 (爆発事故) では不注意に、それぞれ原因が帰属される傾向が注目される。

表1. 原因の自由記述

行動・結果の種類	最頻回答 (自由記述)	最頻回答 %
試験でよい成績	勉強したから	68.8
試験で悪い成績	勉強不足のため	87.5
友人とけんか	意見の食い違い	53.1
友人と意気投合	性格が合うから	50.0
老人施設でボランティア	老人が好き、福祉に興味	各 12.5
老人に冷たくふるまう	相手にひどく扱われた	28.1
スポーツの記録が悪い	練習不足	21.9
スポーツで好記録	練習の成果	50.0
クラスメートから人気	明るいから	21.9
クラスメートから人気なし	態度が悪いから	18.8
交通事故起こす	不注意のため	65.5
安全運転で表彰	安全運転した	37.5
子どもをいじめる	イライラしているから	28.1
近所の子どもと遊ぶ	子どもが好き	43.8
授業に毎日出席	興味があるから	25.0
授業に欠席多い	やる気のなさ 嫌なことがあったから	31.3
朝から不機嫌	寝起きがよかつた	34.3
朝から上機嫌	た	40.6
化学実験で発見	偶然	34.3
化学実験で事故	不注意のため 大人っぽくみられた	71.9
落ち着いた様子	自信がないから	18.8
不安げな様子	面倒だから	53.1
アルバイトの仕事	面倒だから	21.9
アルバイトで熱心に働く	お金がほしいから	68.8

② 選択回答の結果

原因の候補と考えられる選択肢からの選択結果については、最も重要とされた要因と次に重要とされた要因を表2.に示す。

これを見ると、自由記述の結果と相違して、「本人の性格」が選ばれる割合が多く、第1原因では、全体の半数を超えている。スポーツの結果の良し悪しに関しては、「本人の努力」や「体調」を超えて、「本人の能力」が第1原因になっている。全般的に見て、本人の特性・傾性が選ばれる傾向が強く、自由記述の結果とは対照的であった。

表2. 選択肢からの選択の結果

行動・結果の種類	第1原因 (選択)	第2原因 (選択)
試験よい成績	本人の努力	本人の能力
試験悪い成績	本人の努力	本人の能力
友人とけんか	相手の言動	対人関係
友人意気投合	本人の性格	相手の言動
老人施設でボランティア	本人の性格	周囲の他者の影響
老人に冷たくふるまう	本人の性格	本人の注意力・気分
スポーツの記録が悪い	本人の能力	本人の体調
スポーツで好記録	本人の能力	本人の努力
クラスメートから人気	本人の性格	対人関係
クラスメートから人気なし	本人の性格	対人関係
交通事故を起こす	本人の注意力 気分	街路・路面の状態
安全運転で表彰	本人の注意力 気分	社会的規範・ルール
子どもをいじめる	本人の性格	本人の注意力・気分
近所の子どもと遊ぶ	本人の性格	本人の注意力・気分
授業毎日出席	本人の性格	本人の努力 本人の注意力
授業欠席多い	本人の性格 本人の注意力	本人の注意力・気分
朝から不機嫌	気分	本人の体調
朝から上機嫌	本人の注意力・気分	本人の体調
化学実験で発見	運	本人の注意力・気分
化学実験で事故	本人の注意力 気分	本人の能力
落ち着いた様子	本人の性格	本人の能力
不安げな様子	本人の性格	対人関係
アルバイトの仕事	本人の性格	本人の注意力・気分
アルバイトで熱心に働く	本人の性格	本人の努力

③ 結果のまとめと考察

従来の帰属理論においては、性格特性や能力のような内的特性・傾性が重視されてきたが、Malle(2004)は、一般人の行う因果的説明として、感情や欲求、一時的心理状態の方が重要であると指摘している。本研究の自由記述の結果は、それを裏付けるものかもしれない。Malleらも自由記述を多く用いている。しかし、本研究の多肢選択の結果では、性格や能力などの特性要因が主要な原因とし

て選ばれることが多かった。これに関しては、選択肢を呈示されたことによって、特性要因の重要性に改めて気づいたという可能性もあるし、自由記述の場合には、具体的な事例（特に自分の場合）を頭に描いて因果的説明を行うのに対して、多肢選択の場合には、抽象的・客観的な立場からの説明を行うというような違いも考えられる。今回の結果だけから、結論を出すことはできないが、今後、行動・結果の種類を拡充したうえで、さらに検討を重ねたい。

### (3) 研究成果のまとめ

以上、パソコンによる刺激呈示を用いた実験室実験と、自由記述を含む質問紙調査という対照的なアプローチによる研究成果を報告したが、本研究の中では、これ以外に、実験参加者が呈示刺激を明瞭に識別できないような閾下での単純接触効果の実験や、より広範囲の社会的事象に対する因果的解釈を求める質問紙研究も行っている。実験の一部はまだ継続中であるため、確実な結論は下せないが、誤帰属による推論は、かなり柔軟に広範囲の判断に適用可能なこと、ただし、現実の刺激の客観的属性による制限が存在するため、その限界を超えた判断や情動に対しては、影響が及ばないことが明らかになった。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 0 件)

[学会発表] (計 4 件)

- ① 外山みどり 2007 直観的因果理論による原因帰属 日本社会心理学会第 48 回大会、早稲田大学
- ② Toyama, M. 2008 The role of naïve theories in causal explanation. Paper presented at the 29<sup>th</sup> International Congress of Psychology. Berlin.
- ③ 外山みどり・山田歩 2008 顔写真の反復呈示が投票選択に及ぼす影響 日本社会心理学会第 49 回大会、かごしま県民交流センター
- ④ 外山みどり 2009 社会の変化の認知とその因果的説明 日本社会心理学会第 50 回大会、大阪大学 (予定)

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

外山 みどり (TOYAMA MIDORI)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：20132061

### (2) 研究分担者

山田 歩 (YAMADA AYUMI) 2006, 2007 年度

東京女学館大学・国際教養学部・講師

研究者番号：00406878

### (3) 連携研究者

山田 歩 (YAMADA AYUMI) 2008 年度

東京女学館大学・国際教養学部・講師

研究者番号：00406878